

津軽地方の人形ねぶた制作技法の分析
題材の設定と構想、骨組みの技法について

三浦俊一

Analysis of the Production Techniques of Doll Shaped Neputa in the Tsugaru Region
: Concept and Techniques of Skeleton Frameworks

Syunichi Miura

本稿の分析対象である人形ねぶたは、ねぶたと呼ばれる燈籠の様式のひとつである。このねぶたという燈籠が祭りの主役となるねぶた祭りは、青森県津軽地方で行われている夏季の祭事である。「ねぶた」という言葉は、この祭事で制作される巨大な燈籠を指し示した言葉であるが、現在では祭事自体の名称としても用いられている。津軽地方では、弘前市以外でも、多くの市町村で同様の祭事が行われているが、青森市などでは「ねぶた」と表記され、「ねぶた」と「ねぶた」という二つの名称が地域ごとに使い分けられている。しかし、これは戦後以降のことであり、それ以前の資料を見ると、様々な表記が見られる。

ねぶたと呼ばれる燈籠の様式は、本稿の対象である三次元の立体造形で構成される「人形ねぶた」と、二次元の平面描写を扇型の立体構造に構成した「扇ねぶた」とがある。前者は青森市などで統一された様式として用いられている。また、後者は弘前市などを中心に主流となっている様式である。このねぶたの様式の市町村での違いと、上で述べた「ねぶた」と「ねぶた」という名称の違いが混同され、前者の立体造形的様式を「ねぶた」、後者の平面描写的様式を「ねぶた」と誤認されていることが多いが、弘前市を中心とした地域でも、少数派であるが、人形ねぶたが制作されている。つまり、燈籠の名称の使い分けは市町村ごとの地域間でのものであり、燈籠の形状の違いを示しているものではない。本報告では、「青森ねぶた祭」といった固有名詞を用いる場合はこの使い分けに従い、一般名詞では、「ねぶた」という表記に統一して用いることとした。

本稿では、人形ねぶたの制作技法の分析の前段階として、ねぶたのもう一つの様式である扇ねぶたと比較しながら、歴史的背景や制作プロセスの違いを検討し、人形ねぶたを「集団の芸術」、扇ねぶたを「個人の芸術」として論じた。

また、人形ねぶた制作技法から、題材の構想と骨組みの制作作業について、筆者のこれまでの制作実践から分析を行った。

題材の構想では、題材として一般的に制作されている5つの分類を示した。そして、現代の動向として、題材の多様化がより進んでいることを挙げた。次に、題材の構想から制作を始めるところで、制作の責任者によって施される様々なデフォルメの分類を4つ挙げ、分析を進めた。

骨組みの作業の分析では、一次元の線の材料ととらえることができる竹や針金から、どのようにして三次元の立体構造を形成するのかを、「金魚ねぶた」という単純な構造で形成されるねぶた燈籠の制作を通して分析した。また、完成後も内部のからの光によって表面に影となって映し出される線材の美しさを、人形ねぶた独自の美しさとして論じた。

人形ねぶたの制作は、骨組みの制作作業の後、内部照明の設置、紙貼り、墨入れ、蠟引き、色付けと続く。また、同時進行の作業として、土台の木枠制作や、土台部分に貼られる様々な平面描写の制作作業がある。これらの制作技法の分析については、別稿を予定している。